

# チームでやるほうが いい

「今日は、だれが <sup>きょう</sup> 食べ物を <sup>た</sup> さがしに <sup>い</sup> 行くのを <sup>てつだ</sup> 手伝ってくれる？」 1ぴきの アリが たずねました。

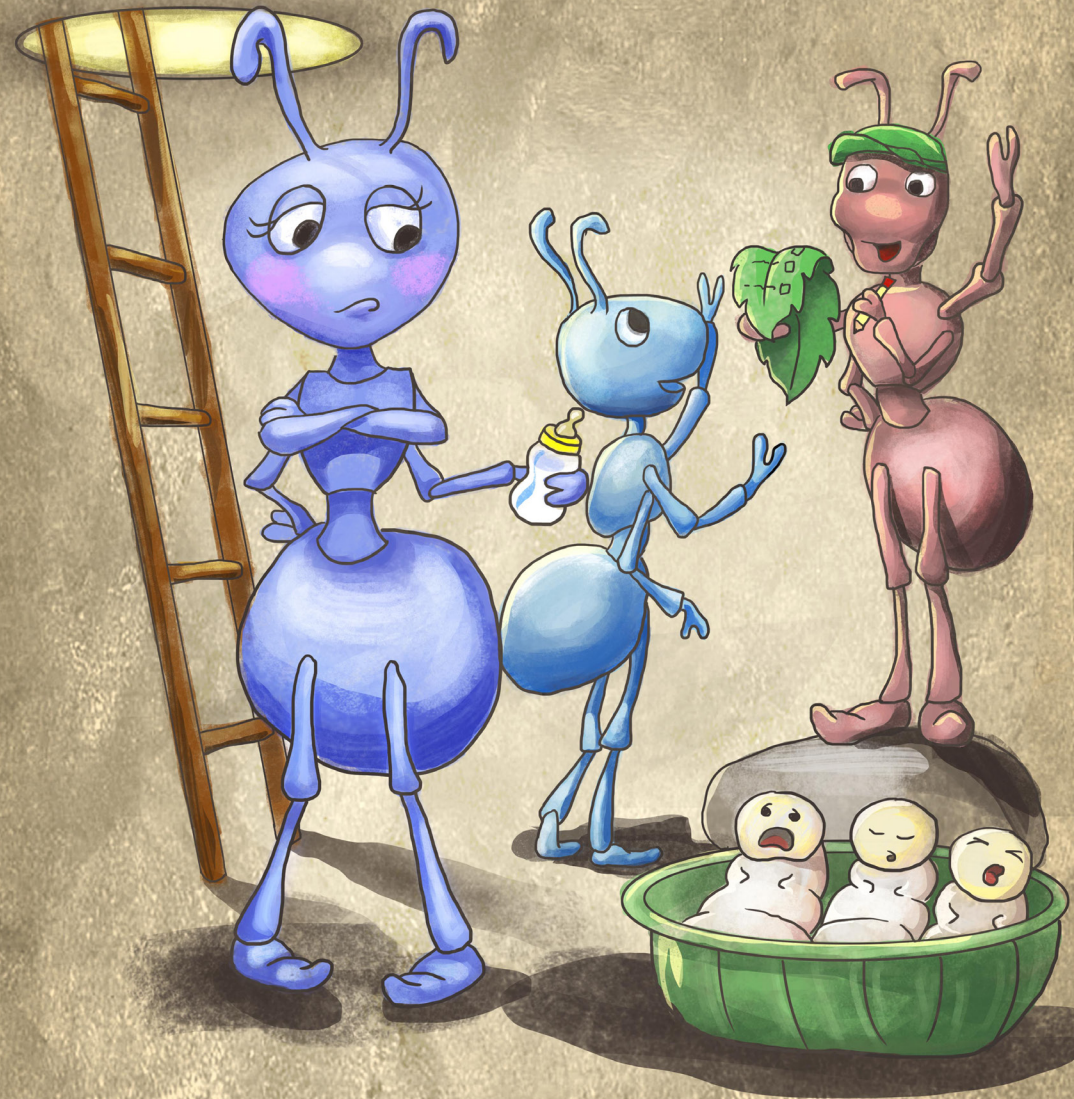
「はい！」 「はい！」 何びきかの <sup>なん</sup> 声 <sup>こえ</sup> が あがりました。

10ぴきの アリが、 <sup>た</sup> 食べ物を <sup>い</sup> さがしに <sup>い</sup> 行く <sup>たい</sup> ていさつ隊として <sup>えら</sup> 選ばれ、 <sup>しゅっぱつ</sup> 出発しました。 <sup>た</sup> 食べ物を <sup>み</sup> 見つけると、 <sup>す</sup> 巣に <sup>のこ</sup> 残っている <sup>なかま</sup> 仲間たちを <sup>よ</sup> よんで、 <sup>す</sup> 巣に <sup>はこ</sup> 運ぶのを <sup>てつだ</sup> 手伝ってもらうのです。 <sup>たい</sup> ていさつ隊が <sup>た</sup> 食べ物を <sup>あ</sup> さがしている <sup>あいだ</sup> 間、 <sup>す</sup> アリの <sup>す</sup> 巣では、 <sup>ほ</sup> ほかにも <sup>す</sup> すべき <sup>こと</sup> ことが <sup>た</sup> たくさん <sup>あ</sup> ありました。 <sup>ようちゆう</sup> 幼虫の <sup>せ</sup> 世話を <sup>し</sup> したり、 <sup>す</sup> 巣の <sup>なか</sup> 中を <sup>そう</sup> そうじしたり、 <sup>そ</sup> そのほか <sup>い</sup> いろいろです。 <sup>アリ</sup> アリたちは <sup>みな</sup> みんな、 <sup>はたら</sup> せっせと <sup>い</sup> 働いていました。

けれども、1ぴきだけ、 <sup>はたら</sup> 働きたがらない、 <sup>ぢ</sup> ジャナという <sup>ちい</sup> 小さな <sup>アリ</sup> アリが いました。

ある日、 <sup>ひ</sup> ジャナは <sup>ひとり</sup> ひとり <sup>ごと</sup> 言を <sup>い</sup> 言いました。 <sup>あ</sup> 「ああしろ <sup>こう</sup> こうしろと <sup>い</sup> 言われるのは、 <sup>もう</sup> もう <sup>ま</sup> まっぴら！ <sup>わ</sup> わたし、 <sup>じぶん</sup> 自分だけの <sup>ほう</sup> ほうが <sup>う</sup> うまく <sup>や</sup> やって <sup>い</sup> いけるわ。」

<sup>たい</sup> ていさつ隊が <sup>も</sup> もどると、 <sup>み</sup> 見つけた <sup>た</sup> 食べ物が <sup>どこ</sup> どこに <sup>あ</sup> あるかを <sup>みな</sup> みんなに <sup>おし</sup> 教えてくれました。 <sup>それ</sup> それを <sup>す</sup> 巣に <sup>も</sup> 持ち運ぶためには、 <sup>た</sup> たくさんの <sup>アリ</sup> アリの <sup>たす</sup> 助けが <sup>ひつ</sup> 必要です。 <sup>ぢ</sup> ジャナは、 <sup>みな</sup> みんなと <sup>いっ</sup> っしょに <sup>た</sup> 食べ物を <sup>あ</sup> 集めに <sup>で</sup> 出かけました。





食べ物を見つけたポーチに着くと、  
アリたちはパンくずを集め始めました。

(わたし、おなかですいたわ。ちょっと  
つまみ食いしようっと。巣に帰るまでなんて、  
待ちたくないもの。)と、ジャナは思いました。

すると、ジャナがパンくずを食べているのを  
見かけたほかのアリが、巣にもどるまで  
待つようにと言いました。

(わたし、ここを出て、自分で食べ物を  
さがしに行こうかしら。そうすれば、いつでも  
食べたい時に食べれるもの。仕事もしなくて  
いいし、だれも、わたしにあれこれ指図する  
こともなくなるわ。)と、ジャナは思いました。

ほかのアリたちができるだけたくさんの  
食べ物を運んで巣に帰る様子を見ながら、  
ジャナはテーブルの足の後ろにかくれて、  
みんながいなくなるのを待っていました。

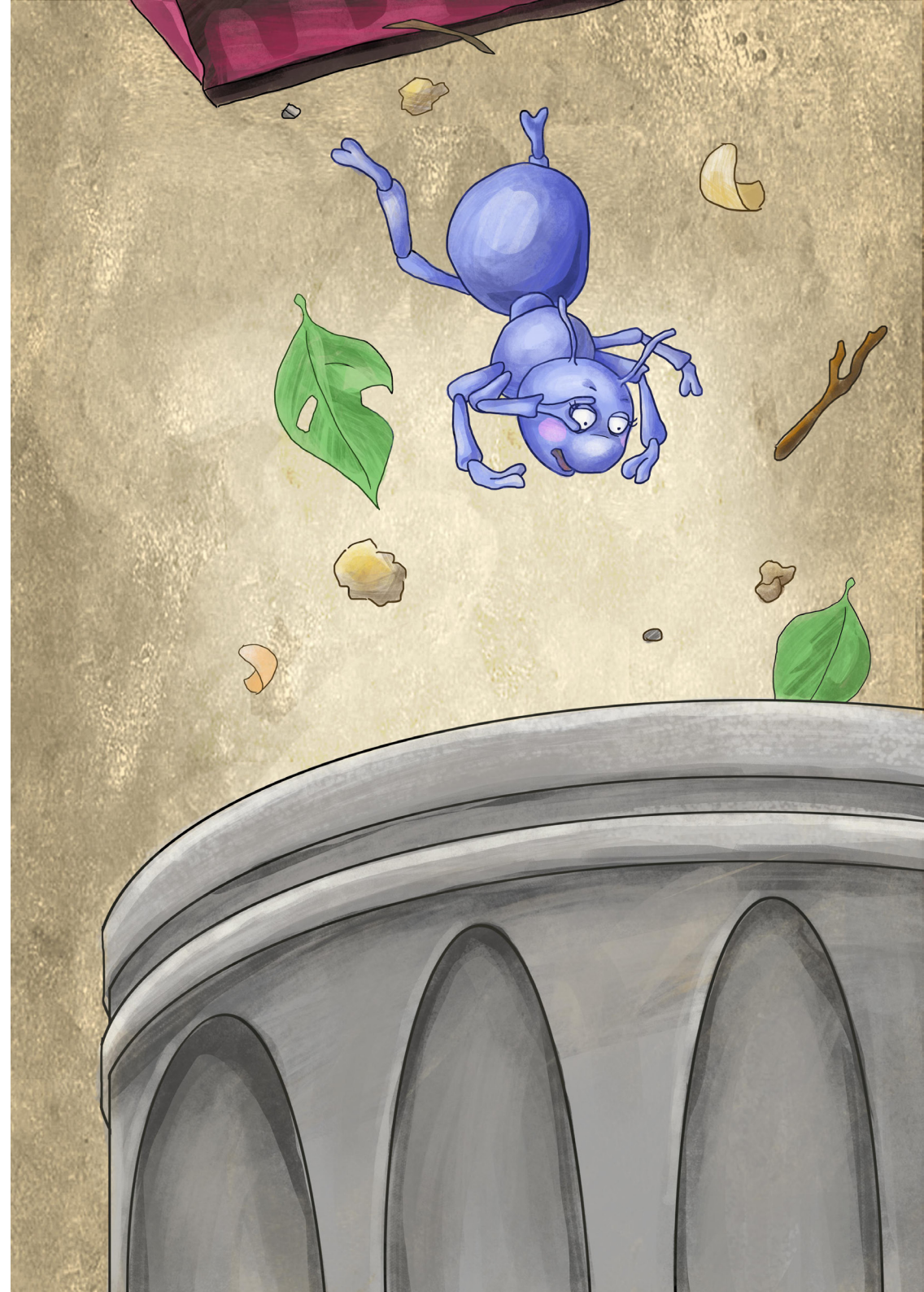




アリたちがみんな行ってしまおうと、ジャナはかくれていたところから出てきて、床に残っていたケーキのくずをガツガツとむさぼり食い始めました。あまりにも夢中になって食べていたので、大きなほうきが近づいてくることにさえ、気がつきませんでした。気がついた時には、ケーキのくずといっしょにほうきではかれて、ちりとりの中へまっしぐら。その後は、ぽ〜んとゴミ箱の中へまっさかさまに落ちていきました。

ゴミ箱の中は暗くて、いやなにおいがただよっています。「やっぱり、こんなの、いい考えじゃなかったわ。」ジャナは悲しそうに言いました。

ジャナは、ゴミ箱のつるつるしたかべを上って出ようとしましたが、上ろうとするたびに、下までまっさかさまに落ちるだけでした。何度も何度も上ろうとしましたが、とうとうつかれ果てて、悲しそうにすわりこんでしまいました。





(もし友だちがここにいたら、みんなで  
アリはしごをつくらせて、あっという間に外に  
出られるのに!) と、ジャナは思いました。

ジャナは、だれか自分のいないのに  
気付いてくれたかなあと思っていました。  
ちょっと前までは、自分だけのほうがうまく  
やっていけると自信満々でした。けれども  
今は、ほかの仲間たちと巣にもどっていれば  
よかったと、心から思いました。(夜の間に、  
ずっとここにいることになっちゃうのかしら。)  
なみだがぽろりとほほを伝いました。

「ジャナ! ジャナ!」

だれかがジャナをよんでいるのでしょうか?





ジャナが <sup>み あ</sup>見上げると、<sup>とも</sup>友だちのキラが  
ほほえんでいます。

「あなたが <sup>き づ</sup>いないのに <sup>き</sup>気付いて、さがしに  
もどって来たのよ！」

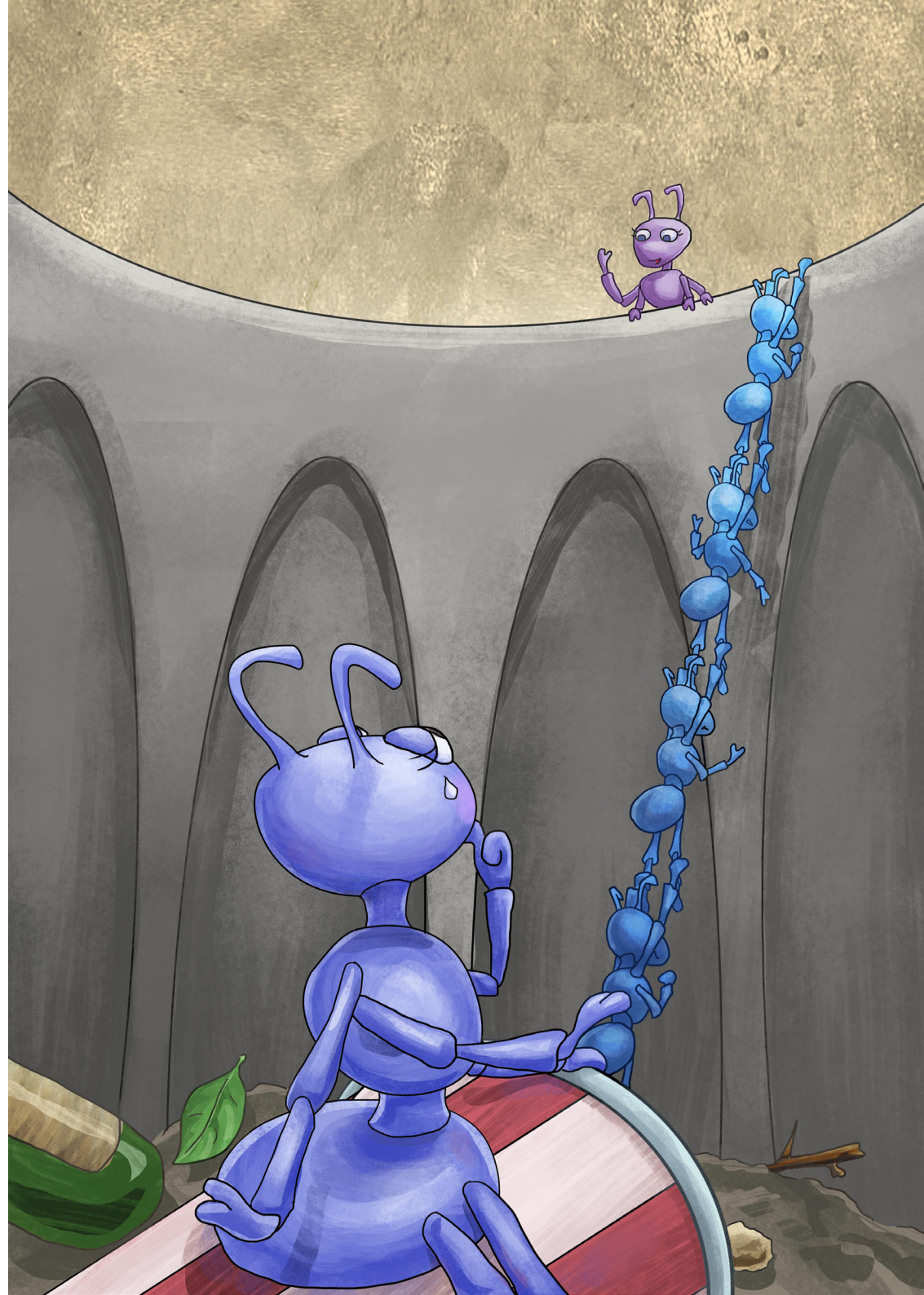
ジャナは <sup>め</sup>目を <sup>こ</sup>すると、もう1度 <sup>ど う え</sup>上を  
<sup>み</sup>見ました。そうです、<sup>た し</sup>確かにキラです！ ジャナは、  
とてもうれしくなって、ほっとしました。

「わたしを <sup>き</sup>さがしに もどって来てくれて、  
ありがとう！ わ、わたし、この <sup>か</sup>かべを  
<sup>の ほ</sup>上れなかったの。ここを <sup>で</sup>出るのを <sup>た す</sup>助けて  
もらえないかしら。」

「<sup>し ん ぱ い</sup>心配ないわ！ <sup>いま</sup>今すぐ、あなたを <sup>こ こ</sup>から  
<sup>だ</sup>出してあげるわね。」キラが <sup>あ ん し ん</sup>安心させて  
くれました。

すると、ジャナの <sup>とも</sup>友だちが、アリはしごを  
<sup>つく</sup>作りながら <sup>お</sup>下りてきました。ジャナは <sup>その</sup>その  
はしごを <sup>の ほ</sup>上って、<sup>ぼ こ</sup>ゴミ箱から <sup>で</sup>出ることが  
できたのです。

<sup>ぶ じ</sup>無事に <sup>ぼ こ</sup>ゴミ箱から <sup>で</sup>出ると、ジャナの  
<sup>とも</sup>友だちは <sup>み ん な</sup>みんな、<sup>よ</sup>かけ寄って <sup>き</sup>来ました。そして、  
ジャナの <sup>ぶ じ</sup>無事な <sup>すがた</sup>姿を <sup>み</sup>見て、<sup>よ ろ こ</sup>喜びました。





「わたし、だれの<sup>たす</sup>助けもいらないと  
おも<sup>おも</sup>ってたわ。だけど、本当は<sup>ほんとう</sup>みんなが<sup>ひつよう</sup>必要だと  
わ<sup>わ</sup>かったの。わたしが<sup>で</sup>そこから出るのを  
たす<sup>たす</sup>助けにみんなが<sup>き</sup>もどって来てくれて、<sup>ほんとう</sup>本当に  
うれしいわ。」

「あなたが<sup>み</sup>見つかって、<sup>ほんとう</sup>本当にうれしいわ!  
ジャナの<sup>とも</sup>友だちが<sup>い</sup>そう言うと、ほかの  
みんなも、うれしそうにうなずきました。

それからは、だれかが<sup>なに</sup>何かの<sup>しごと</sup>仕事を  
てつだ<sup>てつだ</sup>手伝ってほしいと<sup>い</sup>言うと、ジャナは<sup>よろこ</sup>喜んで  
てつだ<sup>てつだ</sup>手伝いを<sup>で</sup>かって出ました。そして、だれかに  
すべき<sup>い</sup>ことを<sup>い</sup>言われたり、<sup>てつだ</sup>手伝いを<sup>たの</sup>頼まれた  
とき<sup>とき</sup>、<sup>ふへい</sup>不平を<sup>い</sup>言うことはありませんでした。  
<sup>ふへい</sup>不平を<sup>い</sup>言いそうになる<sup>とき</sup>時にはいつも、  
ジャナは<sup>じぶん</sup>自分だけで<sup>い</sup>やっていこうとして  
<sup>しっぱい</sup>失敗したけれど、<sup>たす</sup>助けてくれる<sup>い</sup>みんなが<sup>い</sup>いて  
くれて<sup>い</sup>うれしかった<sup>おも</sup>ことを<sup>だ</sup>思い出す<sup>い</sup>のでした。

「わたしたち、チームでやるほうがいいわね。」  
ジャナは、<sup>とも</sup>そう<sup>い</sup>友だちに<sup>い</sup>言うのでした。

作者不明 絵：Y.M. デザイン：ステファン・ミーラー  
出版：マイ・ワンダー・スタジオ

Copyright © 2014 年、ファミリーインターナショナル  
"Better as a Team" --Japanese

<http://www.mywonderstudio.com/0-5/2014/7/21/better-as-a-team.html>

